



# 長浜曳山祭

## 由来

羽柴秀吉が長浜城主であった頃に秀吉は男子を得た喜びに城下の町民にふるまった若干の金子を基金にして、町民は氏神八幡宮の祭礼に曳山を造り、城下町を曳廻ったのが、長浜曳山祭の始まりと伝えられています。

今でこそ浄瑠璃に合わせて子供役者が曳山の上で狂言をしますが、秀吉の頃は恐らく猿楽を舞うたものと思われます。秀吉は猿楽が好きであったとみえ、浅井郡馬渡にいた猿楽師小徳太夫をしばしば城中に招いて舞わせたり、また自らも、いっしょに舞ったというこ

とです。伊香郡森本（現高月町の内）の猿楽師には諸役免除の折り紙を与えて保護しています。

かつて八幡宮では永享7年（1435）堂塔建立にあたって、募財のため、社前に舞台や棧敷をしつらえ、近江三座の猿楽師を招いて勧進猿楽を興行したことがあります。三座のうち、山階座と下坂座は現在の長浜市内になっています。これらの猿楽師の関係で、この地方には猿楽がある程度行われていたものと思われます。それが秀吉によって移動性の舞台を持った曳山となったものです。



15日朝八幡宮境内に曳山が勢揃いする





神輿の渡御



山組の朝渡り

その後、猿楽から派生した能や狂言にと移行し、次いで元禄頃から浄瑠璃が盛んになりますと、浄瑠璃に合わせた芝居を演ずるようになり、それが現在へと伝わって来ました。それでもやはり昔の猿楽や能や狂言を演じていた頃の名残りが今も曳山に残っています。即ち舞台への役者の出入りのために勾欄の外にしつらえた歌舞伎劇であれば花道というべきところを橋掛りといい、楽屋から舞台への出入口を奥表口といったりしています。

出し物は古いところはわかりませんが、明和6年(1769)からの記録があります。その出し物に外題を付けるのに、始めは仮名まじりもありましたが、安永2年(1773)からは5字～9字の漢字ばかりとなり、安永8年からは、ほとんど5字となり、これが出し物の外題であって、同じ忠臣蔵であっても別に外題を作って付けます。また記録には、始めは外題だけしか書いてないので、その内容は外題によって推測するしかありませんが、寛政頃から外題の下に、二十四孝とか毛谷村六介とか註記するようになりましたので、内容もわかるわけです。

長浜の狂言は長浜で仕組み、同じ出し物でも外題は年々新たに作るものであり、漢字5字にまとめた外題は長浜独特の文学であると

いう人もいます。

祭礼の期日は、中世は4月3日に大祭が行われていましたが、秀吉の時、9月15日となり、それが永く続いていましたが、明治維新後は10月15日となり、また4月15日となったり、しばしばかわりましたが、昭和25年からは4月15日が祭日と決定して以来続いています。

#### 組の名称

山組の名称は永く町名をもって「何町組」といっていました。文政8年(1825)彦根藩主井伊直中(直弼の父)が60才のお祝いを行うにあたって、宮町組(高砂山)と大手町組(寿山)の2組の曳山を解体し、湖上を船で彦根に運び、城内槻御殿で11月18・19の両日、12組の狂言を直中に見せました。この時、直中から各山組に能面が与えられましたので、それによって組名の町名を「何々山」または「何々山組」と改めました。

#### 祭礼行事に参加する人々と役割

中世石清水八幡宮の社領が坂田郡細江庄に480町ありました。それが細江庄から分立して八幡庄は成立しました。その庄域内に居住する旧長浜町(江戸時代の)の人たちは、12組の山組で狂言を奉納し、長刀組は太刀渡りを奉仕し、それらの周辺部の人たち(七郷と



いう)は神輿をかつぐ役を勤め、庄域内の人たちは一丸となって4月13日から16日まで4日間の祭りに、何らかの形で参加しているということになります。

この大きな祭りの運営と総括にあたるものを総当番といいます。12組の山組が2組ずつ交替で1組が3名ずつ合わせて6名と狂言を執行する出番組(4組)から各1名と長刀組・氏子総代・七郷から各1名、合わせて13名で組織します。

各山組の若衆には、舞台方・かずら方・衣裳方・賄方・三役(振付・太夫・三味線)方・役者方・囃子方などの役があって、狂言についての一切の世話をします。

曳山の管理、他の山組との交渉、祭礼行事の進行などは、若衆を終わった「中老」がこれにあたります。

中老から選出した2人の負担人がその山組の全責任を負い、またその組の代表者でもあります。総当番の招集によって会合に負担人はその組を代表して出席し、祭礼についての協議や決定をします。

## 行事



太刀渡りのよろい武者

4月15日を本日(ほんび)といっています。その前後にいろいろの行事があり、準備は早くからします。

2月1日  
初寄り  
各山組の代表者である負担人が八幡宮に集まって、狂言執行についての協議を



太刀渡り若衆

します。初寄りが終わると準備にかかります。

3月20日頃

役者と外題や振付・太夫・三味線の役を定めます。役者は、たいていその組内の5~6才から12才位までの男子です。

始めは「読み習い」といって、振付の書いた台本によって台詞(せりふ)をおぼえます。

3月28~29日頃

稽古宿に設けられた仮舞台で「立ち習い」をします。

4月5日頃から

太夫と三味線がはいて稽古も本格的となり、稽古を公開して見せます。

4月9日

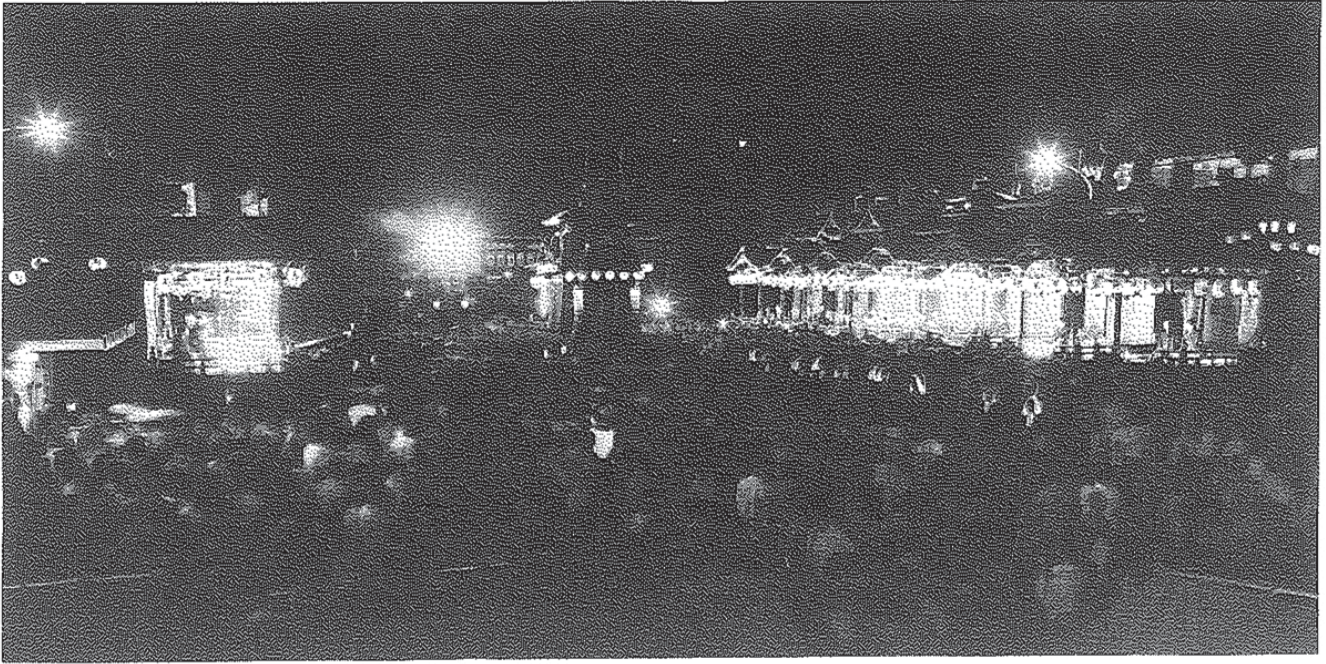
線香番 ひと組の狂言の所要時間を総当番が調べにまわります。狂言は40分以内という申し合わせになっています。時計の無かった時代に線香によって計時したので、この名が生まれたのでしょう。

4月9日~12日

裸参り 13日のくじ取りに第1番を引きあてたい願いから、毎晩9時頃から各山組の若衆がくじ取り人を先頭に、各自その組の印入り弓張り提灯を持ち、列をつくって掛声も威勢よく八幡宮に参拝し、みたらして水ごりをして祈願します。勇壮な裸参りによってお祭り気分は盛り上がってきますので、裸参りは長浜祭の前奏曲とでもいえるものです。

4月13日





戻り山の夜景

起し太鼓 午前2時頃から囃子方の若衆が、笛、太鼓、スリガネの囃子で、各組毎にその組内の中老・若衆の家々の戸をたたいて起こしてまわります。

御幣迎え 午前7時 八幡宮に中老若衆が紋付羽織袴の正装で集まり、曳山にまつる神のよりしろである御幣を各山組に迎えます。御幣は狩衣を着た御幣持ちという役の子供が棒持します。

神輿の渡御 午前10時半神輿は本社からお旅所に渡御をします。

くじ取りの神事 午後2時 各組から選ばれた若衆のくじ取り人は負担人に付き添われて八幡宮に集まり、神前でくじを引いて祭礼当日の狂言奉納の順番をきめます。

十三日番 午後7時から各組の町内に曳山を出し、御幣を前柱にあげ、役者は本番の衣裳をつけてかづらをかぶり、初めて曳山の上で狂言をします。

4月14日

登り山（山送りともいう）午前10時頃から各組の町内で狂言を執行し、正午頃から末番の山組から順次曳山を八幡宮の境内に曳行し、定められた位置にすえます。

夕渡り 午後7時から役者が行列して八幡

宮から各組の自町に渡りをして帰ります。この渡りの役者の姿は、すべて狂言を終わった時のままです。

4月15日

起し太鼓 13日未明と同様です。

山飾り 午前6時

朝渡り 午前7時 各組の町から八幡宮へ役者は狂言の始まる時の姿で渡ります。

太刀渡り 午前8時 太刀渡りは12の山組以外の長刀組が奉仕をします。甲冑を着た10人の小児が神木で作った長さ2mほどの太刀を佩き、力士に扮した30余名の若衆が先駆して小舟町から八幡宮に渡ってきます。力士は紋付の着物に角帯をしめ、しりからげをしておしりを見せ、前には紺ドンスや緋ラシャの化粧廻しを垂れ、白たびわらじばきで右手に金棒を引くといういでたちで、俗に「しりまくりの渡り」といっています。

太刀渡りは源義家が八幡宮をこの地に勧請の始め、滋賀郡から湖上を渡って、今の長浜の湖岸に上陸して参拝した時、土地の人がそれを迎えて案内した時の有様を伝えているものだといわれています。

この太刀渡りの行列がお参りをすませてお旅所に向かう時、境内の出口で退列の合図を



しますと、一番山を曳出して狂言の奉納を開始する慣例となっています。

長刀組には12組の曳山とは構造の全く異にした三ツ車の飾り山があります。山の露台上記の太刀や幟を飾るもので、14日にお旅所に曳行し、15日戻り山の時自町に曳いて帰ります。

狂言の奉納 午前9時開始 13日のくじ取りの神事で定められた順番で狂言を奉納します。神前での奉納狂言を終わりますと、曳山は順次 800mほどはなれたお旅所に向かいます。途中4ヵ所で狂言を行います。

お旅所での狂言奉納 午後5時頃からは行います。

戻り山 午後9時頃 全部の組がお旅所での狂言を終わりますと、まず神輿が還御になります。この時一番山は「戻り山」の囃子を始めますと、順次各山は先番の組の囃子に合わし賑やかにしゃぎって神輿を送ります。

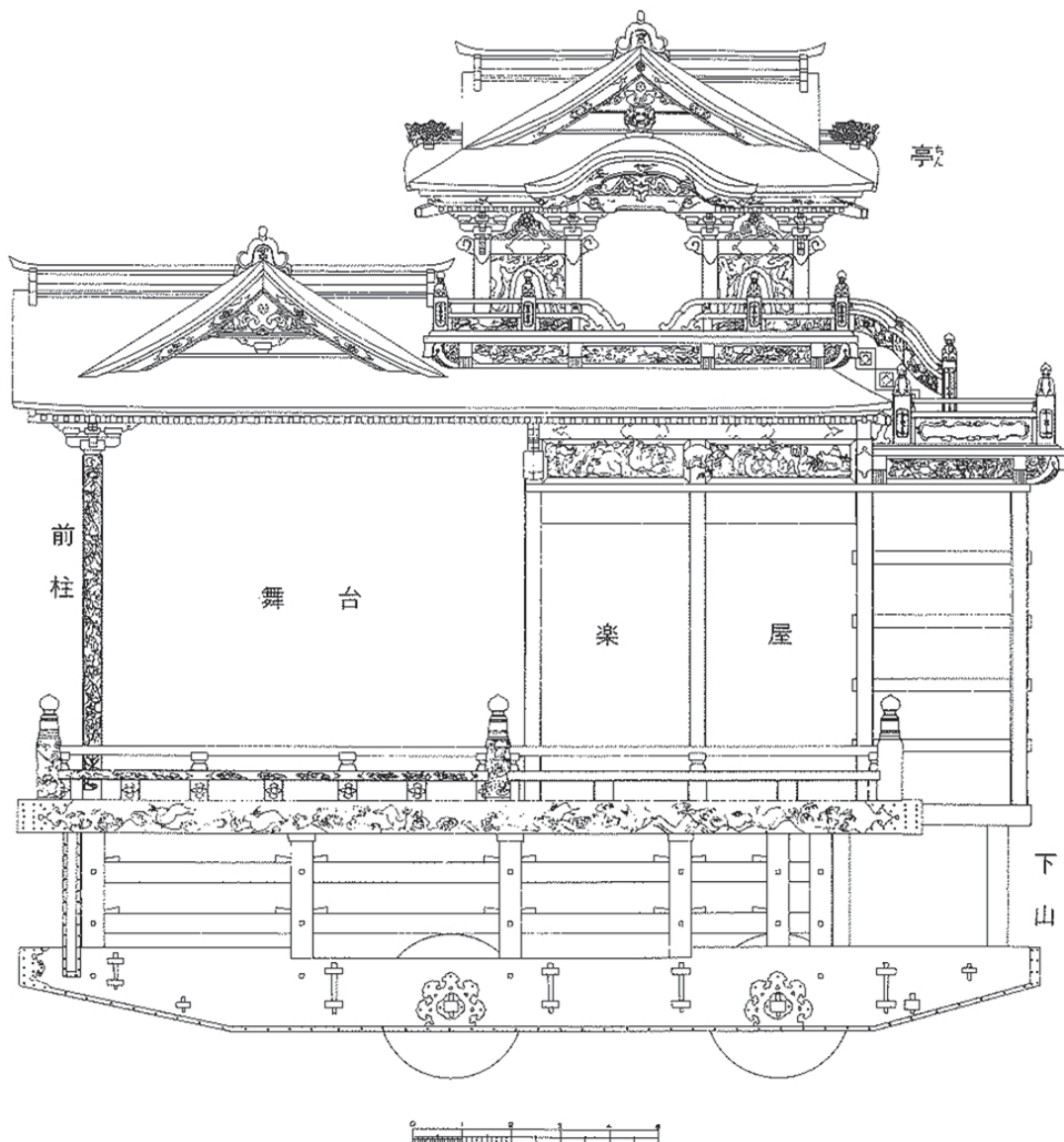
神輿に続いて長刀組が行列を整えて自町に向かい、曳山は一番山から順次曳行して自町に帰ります。

4月16日

後宴 正午頃から夜にかけて各山組の組内数ヵ所で狂言を行います。

4月17日

御幣送り 午前8時 13日に迎えた御幣を八幡宮にお返しします。これで祭礼の諸行事



高砂山側面図

は全部終わったこととなります。

### 曳山の構造

曳山は直径約90cm、厚さ約30cmの輪切りにした車を4個取付けています。車の用材は多くはトチを用いています。

舞台・楽屋・亭の3部からできており、前に舞台があり、そのうしろに続いて楽屋・楽屋の上に亭があります。

舞台の広さは12組共、4畳半です。そのうちに1畳敷ほどの広さで、高さ25cmほどの上段を置きます。

楽屋は子供役者が衣裳を付けたり、出番を待ったりし、また太夫が三味線の音色に合わせて浄瑠璃をかたる場所でもあります。

亭は長浜の曳山独特の囃子をするところです。

曳山の大きさは12組共それぞれ多少の差はありますが、間口は3m余り、奥行きは6.5mから7mです。舞台屋根の棟までの高さは約5m、亭の棟までの高さは6mから7mです。更にこの上に鳳凰あるいは飛竜・金鶏の木彫を置いたり、直径30cm余りのギヤマン製の宝玉をのせたものもあります。

亭は各組毎にその構造美を競ったかのようで、単層・重層があり、屋根には四注造・宝形造や、また入母屋造に千鳥破風や軒唐破風を付けて八ツ棟造としたものや、六角円堂造など色々あります。その巧妙な構架組立方は建築上の参考になるところが多くあります。

舞台・楽屋などの柱はすべて方柱切面取で、面取率は13分の1です。桃山時代の様式を残し、臺股・木鼻などには鎌倉から室町時代の様式をうかがえるものもあります。

### 曳山の飾り

曳山の構造や型式は12組共ほぼ同様であっても、装飾に用いた幕類・彫刻・飾金具などは、それぞれ趣向をこらしています。

幕類には毛綴織（ゴブラン織ともいう）・刻糸織・蝦夷錦などの高貴な織物のほか、明時代の刺繍やベルシャ氈・緋ラシャ・紺ラシ

ヤなど江戸時代に南蛮船や中国船によって舶載されたものがあります。これらの幕類のうち鳳凰山と翁山との毛綴織見送幕は16世紀にベルギーのブリュッセルで織られたもので、重要文化財に指定されています。

飾金具には江戸時代幕府の御用鉄炮師が住んでいた国友の金工の手になるものがあります。また象嵌技術にすぐれていたのも、膳所藩臣の列に加えられていた奥村菅次一派の細工人を、わざわざ長浜に招いて造らせたものもあります（翁山・鳳凰山・常磐山・諫鼓山・万歳楼など）。

江戸時代の長浜及びこの地方は、生糸・縮緬・蚊帳・ビロードなど繊維工業の盛んなところであり、長浜の町はそれらの産物の集散地として繁昌し、町衆は裕福でした。そうした経済状況が背景となって祭礼も賑やかになり、延享から文政頃（1744～1829）にかけておよそ80余年の間に改造され、始め素朴なものであったのが、今日見るような華麗な曳山となりました。

しかし、前記のように前代の建築様式の残っていることは天正年間創建説を裏付けるものであります。

### むすび

曳山祭は各地で行われていますが、長浜祭はその伝統の古さといい、曳山の数といい、豪華さから見ても、また祭礼行事のスケールの大きいことにおいて、全国で曳山を使用した祭礼行事の代表的なものといわれ、京都の祇園祭など8件の中に長浜曳山祭も入れられて、その曳山行事が昭和54年2月3日文部省告示第11号で重要無形民俗文化財に指定されました。毎年4組ずつ交替で狂言を執行していましたが、昨年は国指定の祝賀記念行事として、4組のほかの8組も曳出し、戻り山の時はお旅所に62年ぶり12基の曳山と長刀山が揃って大盛況でしたが、今年もまた昨年同様、祭りのフィナーレを飾る壮観さが見られることになっています。（中村林一氏提供）